

Newsletter

September 2004

<http://www.aack.or.jp>

目次

フォスコ・マラーニの
死にちなんで

谷 泰……………1

河口憲海と宮崎武夫

平井 一正……………6

ベルニナ国際登山医学研修会
(平成十六年春) 参加報告

中島 道郎……………7

第二次梅里雪山峰登山隊の
収容作業報告

吹田啓一郎……………8

大日岳事件に不起訴決定

田中昌一郎……………9

新入会員紹介・奥宮清人氏

松林 公蔵……………10

事務局報告

……………10

会員動向

……………12

編集後記

……………12

フォスコ・マラーニの 死にちなんで

谷 泰

フォスコ・マラーニ(一九二二年、フィレンツェ生れ)は六月八日、フィレンツェで九二年の長い生涯を全うして、この世を去った。もちろんいまこのニュースレターでこの事実を知らされる人のおおくは、名前は聞いていても、直接会ったこともなく、一流のクライマーとして名をはせたわけではないかれの死を、縁遠い出来事と思われるかもしれない。ただ一九六八年、学士山岳会の

しは、ちょうどイタリアにいる立場も幸いして、個人的な立場でその告別式に参列した。ただうえのような縁から、編集者にマラーニにちなんでなにかを書いてほしいともめられた。そこで、たんに岳人としてだけでなく、日本について、いやアジアについて深い理解をもって、その意味を世界に知らせた文筆家としての彼の人生について簡単に記し、かつ死を予想して告別式のためにあらかじめ彼がしたためた遺言とも言える文を紹介しておく。

を指摘したイタリア隊の隊長としての彼に出会っている。そしてそこで、とりわけ京都を愛し、すでに日本研究者としてエスタブリッシュしていた彼の日本隊へさしむけた深い友情と、ボナッティなど若いイタリアのクライマーを暖かく包み込んで隊を率いていたエクスぺディション・リーダーとしてのかれの人となりに魅せられたことは、チョゴリザ隊の報告書を読んだ人ならば知っている。一九六〇年代以後、個人的に彼とそれなりに親しく交わったわた

彼は、イタリア人で当時著名な彫刻家を父とし、オルダス・ハックスレーをはじめ、ロ・エ・ローレンスなど、当時イギリスでの一流の知識人たちと親交のあったイギリス人の母のもとで成長している。つまりかれはすでにこの家族的環境において、イタリアというかぎられた世界から距離をおいた、より広い視点から世界をみる目を身につけたようだ。しかも両親はともに旅行が好きであったという。このことが山好きであるだけでなく、こよなき好奇心をもって異文化世界を旅した旅行家としての彼の人間形成に深く関係しているとみてよいだろう。二十歳前後は、しきりにアペニンをはじめ、ドロミテ地方の山に出かけている。ところでアジアとはじめての関



『チョゴリザBCにて、自著の邦訳「チベット そこに秘められたもの」にサインして桑原先生に贈呈するマライ二さん。1週間前に日本の出版社から「バルトロ氷河マライ二様」としてにとどいたもの。』

「チョゴリザ隊資料」提供

つぶさにみるなかで、かれはつぎのような観察をしている。

インドの港で、香港の港で、寄港するたびに、土産物の小物や革細工などをとんだ小舟に乗った物売りが、雲霞のように船のまわりにたむろす。それはだれもが経験する光景だ。ところが日本の神戸に近づいたとき、湾内は静穏そのもの、これまでみてきたアジア的喧噪とカオスが全くみられない。そして港の岸壁をみれば、そこに一直線に並列した黒々とした人の列がみえる。そしてそれが、やがて手には白い手袋をした人力車の車夫であることをみいだす。こうしてかれは、そこで、これまでみてきたアジア世界のたんなる連続ではない、別個の文明世界がそこにあるという思いにいたるのである。

なんとということない日常の出来事の差異の中に、この核心をみる鋭敏な観察者の姿といつてよいだろうか。かれはこうして、日常の出来事をありのままに写す写真家をこえ

て、日常の出来事の背後にある固有性を、それぞれの歴史と文化の深みのなかでとらえるべく、つねに好奇と思索を繰り返す生活を、日本で開始したようである。彼はまず、札幌は北大の人類学教室に籍を置き、アイヌの村を訪れて、まさにアニミズム的とも言える神々の世界を知る。またその後、京都大学のイタリア語教師として京都に居所を移し、日本人が磨き上げた自然への繊細な感性と美学の粹に触れることになった。

ただ当時のかれを取り巻く世界情勢は、彼を、そして彼の家族を思いがけない運命へと導くことになる。日本はまもなく戦争状態に突入し、やがて同盟国としての日伊関係がゆらぐ。こうしてかれは、外国人としていづれの側につくかという政治的立場を表明することを余儀なくされる。そしてファシズムを肯定できないものとして自己表明をすることにも逮捕されて、家族ごと名古屋郊外で、外国人捕虜としての収容生活を送ることになった。ただそこで支給される食料はひどくまずしく、幼い3人の子供と妻をとまなうものにとつて、そこでの生活は耐え難いものであった。彼はついに思いあまつて、戦争捕虜にも最小限保証されるべき生存権を主張して、官憲の前で自らの小指をナイフで切り落として抗議する。身体全身を張つての自己表明としての血書へのなぞり、それは相手(日本人)のもつ論理を我が身のものとするることによって相手を封ずる、劣位にあるものが唯一とりうる抗議の手段であったともいえる。ただその背後に、人間性への等しき尊厳をもって最

わりは二十五歳(一九三七年)のときであった。当時著名なチベット学者であったトゥッチが、再度チベットに調査行を計画していることを新聞紙上で知り、応募し、写真家としての才能を評価されて、チベットに赴くことになる。こうして、そのときの経験およびその後の再訪経験が、チベット人のところをよく映し出した写真を含めた名著『秘境チベット (Secret Tibet)』を生むことになっている。ダライ・ラマはこの書物をこよなく愛したという。

ところで一九三〇年代後半、イタリアはファシズムの流れが強まる時代であった。彼はその息の詰まるような空気を嫌い、日本留学生を募っていることを知って応募する。そして一九三八年暮れ、日本に向けて出発することになる。すでに民族学的関心をもっていた彼は、アイヌを研究の対象とすることをめざしていた。ただ、すでに自文明とは異なる高度に洗練されたチベット文明に触れ

低限の生存条件をみとめられることへの、身を切つての強い要求がたぎっていたことは、だれもが推測できることだろつ。官憲の取り扱いには、この彼の行為で急遽改善するのだが、彼はこの逆境のなかで、彼等を等しく人間としてみて、かれらにひそかに慈愛の手をさしのべる老婆や仏教者に出会いもしたのであつた。日本という異国の地で、惨めな虐待を受けながらも、その後日本人を愛し続け、戦後いくども日本を訪れて、日本紹介の名著としていまも読み続けられている『日本ときどき(Ore Giappone)』が生み出されたのも、このような小さきもの示した人間としての温情との出会いがあつたからだといつてよいだろつ。かれは、この時代に彼等に温かい手をさしのべた人々を、終生忘れず、折に触れて訪ねている。

さて戦後、イタリアに帰つて以後、彼は日本、チベットを再訪するだけでなく、イタリアの山岳会の求めに応じて、ガツシャーブルム登山隊の隊長として、一九五八年、カラコラムに出向くことになる。イタリアのK2登山隊が、体制に密着したデジオを隊長にした国を挙げた事業であつたのにたいして、ガツシャーブルム隊は、フォスコという、権力からつねに距離をおきつつ、豊かな知性とユーモアに満ちた人間性をもつ隊長のもとで、のびのびとした隊であつたことは、いまも当時の隊員が述懐している。また当時はクライマーとしての実力はあるが、地方の出身の登山屋であつたボナッティが、のちに世界の僻地まで赴いて、優れたドキュメンタリーをもの

す著述家となつたのも、まさにフォスコに触れたためだと告白している。ある意味でチヨゴリザ隊長の桑原さんの役割を想起するのは、わたしだけではないだろつ。翌年一九五九年には、ヒンドウクシユのサラグラール峰登山隊長として、ローマの学士山岳会の隊を率いている。その報告書は、『パロパミーンソ (Paropamisso)』という題で出版されているが、登山報告の域を超えて、それはヒンドウクシユ地域の歴史と文化を広い視野から紹介したものととして、優れた著書となつている。

こつして、かれは写真家、登山家、旅行家、民族学者、文明の省察者として、その著書を世に問うことになつたのだが、イタリアのアカデミアムの世界ではけつして早くから評価されたとはいえない。かれはながくイギリス、オックスフォードでの講師としての地位に甘んずることにとどまつた。彼が祖国イタリアでようやく大学の地位を獲得するのは、人生のなかばを終えてのこと、ようやく一九七〇年代になつてフイレンツェ大学に日本学の講座が創設され、その教授になつてからのことである。

かれはこつしてイタリアで日本学を学ぶ若い研究者が集える場「イタリア日本学研究会」を創設している。そしてのちに京都の国際日本文化研究センターに客員教授として招聘された。

死の数年前からである。かれは心臓の疾患でペースメーカーを体内に装着する身になつた。ただ終生明晰な頭脳を維持して、その広

い知見で著述活動を続けた。また、つねに山登り屋がもつたつたくなかない人間味と寛容さを持ち続けて、おおくのフイレンツェを訪ねる日本人の相談相手になつた。死因は、ペースメーカーの不調を直すための手術の結果が不首尾で、病院で最後の息を引き取つたとのことである。

わたしは彼の死の知らせをまずはテレビのニュースで聞いた。そして告別式が六月一日、フイレンツェの旧市庁舎パラッツォ・ヴェッキオで執り行われることを彼の奥さんミエコさんから確かめて、その日フイレンツェに赴いた。

時はすでに六月、ヨーロッパは観光シーズンがはじまつており、フイレンツェの駅前も、街路も、現地のフイレンツェ人よりも、はるかに外からの観光客の方が多くみかけられる、そんな季節に入つていた。パラッツォ・ヴェッキオは、かつてルネッサンス時代の都市中心、市の政庁があつたところで、その前にはよく知られたミケランジェロの若き頃の作品ダヴィデの彫像が立つている。そしてここでも庁舎の前の広場は、観光客であふれかえつていて、およそこんなところのどこで告別式があるのかという趣きを呈していた。

いったいこの建物のどこで？ こんな思いでわたしは、この高い石造りの建物の一方にある入り口脇に立つている女性警官に、フォスコ・マラーニ二氏の葬儀に来たが、どこであるのかとたづねた。すると彼女は入り口の奥の暗い空間を指さす。たしかに指された方向には細長いテーブルが置いてあり、そこ

に記帳用の帳面が三冊あまりポールペンとにもおいてあった。告別式の間帯に都合がつかず、すでに記帳だけを済ませて立ち去った人もあるのか、すでにいくつものサインがされていた。ともあれ一時間ほど早く来たために、記帳を済ませたが、そのテーブルから奥、右を見れば、うすくらい空間のむこうにひっそりと遺体を入れたお棺がみえた。棺のまわりには二十鉢ほどの花が飾られているだけ。さしづめ日本だったらその花鉢には、献花をした団体や個人の名前が書かれているのだが、およそそんなものはまったくない。そしてそのわきに三〇席ほどの折りたたみ椅子が並んでいるだけのひっそりした告別式場で、フォスコはその脇のお棺の中で穏やかな表情で永遠の眠りについていた。誰か親族がもたせたのであろう、バラの一枝が右手におかれてあった。わたしはフォスコに向かって手を合わせてからあと、右手に彼の娘ダーチャ（現代イタリアの著名な小説家の一人）がいることに気づき、挨拶をした。そして苦しんだのかとたづねると、いや眠ったままままたったということであった。

ともあれ少々早めに来たわたしは、しばらく外に出てから、四時にもどると、すでに告別式場には二百人近くの人が来て告別式の開始を待っていた。そしてのちに紹介するフォスコが予め死を予期して書いた参列者への最後の言葉を記した印刷物が配られた。そこには、なぜ教会の葬儀を避けて、一見味気ない世俗の葬儀を依頼したのか、その信条が、これの最後の信念表明として記されていた。

そうこうするうち、程なくフィレンツェに市固有の祭服を着込んで、片手にトランペットを持った市の儀仗兵が三人、市長とともにやってきた。そして娘のダーチャが前に立ち、式次第としてこれから追悼の言葉を述べる予定者を紹介する言葉を発し、告別式は始まった。そこで弔辞を述べたのは、フィレンツェ市長、イタリア山岳会フィレンツェ支部の会長、イタリア日本学研究会会長、山岳会ガロフアニヤーナ（アペニン山脈のフォスコの山小屋のある地域）地区会長、日本大使、司祭になったが、山にゆくことをフォスコに教わって自然の美しさ、そして無償の山登りのうちに喜びを見いだすことを教えられたというフォスコの若いときの友人、そして妻ミエコといった人々だったが、いずれもフォスコに対する友情と敬意に満ちたものであった。そして最後にトスカナの地方山岳会のグループによる山の歌、死せる友を悼む歌を含む三つ（わたしも知っているものだが）、しつとりとした合唱で、フォスコの死を悼みつつこみ上げてくる涙をぬぐう人の姿も見受けられた。最後にチベットの僧侶が三人読経、そして市の祭服を着た楽師の哀悼のためのトランペットの吹奏で式は終わった。

そこらで、教会での著名人の葬儀に比すと、いかに簡素なものであったが、そのとき配られた彼の残した最後のメッセージは、たんにイエルサレムという呪縛かみずからを解放しえない（じつは自分もそこに属している）ユダヤ、キリスト、イスラム文明世界の人々をこえて、これまで彼が旅してきて出会ったすべての文明世界の人々に向けてむけられており、文明の対立のもとで不安に満ちた日々を送らざるをえない現在の世界情勢を考えるとき、だれもがひそかに心に抱きつつ希求している立場を、控えめながらも心強く表明している。それを読む人は、味気ない俗なる告別式場に友を招くことにした理由釈明とともに、矛盾に満ちた現代に生きるひとびとにむけての、立ち去るものとしての最後の祈りの声をそこに見いだすはずである。

親しき友人諸氏へ
この度、宗教色抜きの葬儀の常として、いかにも味気ない葬儀場に集まっていたただくことになったことを、心苦しく思います。もちろんわが愛するフィレンツェの崇高で歴史の香りあふれる教会、そして賛美歌、散香の香り、音楽そして花に満ちあふれた場に、皆さんをお招きできたのであれば、言うまでもなくすばらしかったろうことは、重々承知していること。ただそれを阻んだのは、つぎのような自己の信条を最小限貫きたいという思いでありました。

あなた方は尋ねることでしよう。いまお前は何処に居るんだい？ いったいどういう信念のもとで、おまえは、だれも避けることのできない不思議な旅に向けて、地球を去ろうとしているんだいと。

それにたいして、わたしは、わたしの人生でのある決定的な出来事からことを話しはじめたいと思います。一九六五年から六六年にかけてのことです。わたしはニューヨークの

ハーケルト・ブレース社の依頼を受けて、かの三つの大宗教のセンターである都市イエールサレムについて一書をものすことになりました。その書物は一九六九年『イエールサレム：時代を語る岩』という題で発刊されていますが、そのためにイエールサレムに数ヶ月滞在することになりました。おまけにこの訪問の機会に、わたしは聖書（旧約聖書と新約聖書）とコーラン（わが友アレックスサンドロ・パウサーニによる名訳ですが）を丹念に読むことになったのです。実際わたしの書齋にある『イエールサレム・バイブル』と『コーラン』を見てみてください。そこにはたくさんアンダーラインがしてあるのを見てくださいが、それはすべてそのときのものなのです。

ともあれこの経験以後のことです。わたしは神の啓示（Revelation）という問題を真剣に考えはじめました。そしてその後「月から地球にメッセージを伝えるために来た月界人」ということを意味する“CTLUVT”という語を造語したのですが、このよつな立場、言い換えると真の意味で偏見から自由な精神の持ち主からみて、この啓示 というものは、なにもイエールサレムにおいて発せられたかの有名な三つの啓示に限定されるものではないと考えはじめたのでした。それこそ、視野を広げて、啓示は、ソロアスターの思想にも、ヒンドウーのリシの考えにもある。いや仏教をどうして無視できません。サツダルマ・プンタリーカもまた啓示の一つではないか。さらに世界の諸宗教へと視野を広げてみるなら、モルモンのそれ、バハイのそれ、ヴ

イエトナムのカオダイのそれ、日本の天理教のそれと、おおくの啓示の事例を見いだすことができる。それこそガルザンティ社の宗教小辞典を見るだけでも、そこには三十八もの宗教が指摘されています。そのそれぞれにおいて啓示という現象が認められなくてはならないというわけです。まさにこういう啓示の洪水を前にして、神様、いったいどれが本當の信用にたたる啓示のですか？まさか神様あなたは、人間をからかおうとしておられるんではないでしょうか？ある啓示に対してこれがより優れているといういったい何処にそういう保証があるんでしょう？と尋ねたくなるほどののです。

わたしはこうした疑問を抱きつつ、それぞれに互いに距離を保った諸文明に向けての旅をし、それにじかに触れる経験を通じて、はつきりと次のよつに思うよつになったのです。つまり、ある特定の場所、特定の時点で、特定の人物に開示されるころの、局在する啓示 *Revelazione Puntuale* というものではなく、常在する啓示 *Revelazione Perenne* というものが実はあるんだ。それは自然の中でも、日常の人間の世界のなかでも、もし聴こうとするものならいつでも何処でも、神秘的な語りかけとして受け取られるものであり、じつはそういう宗教的場にわれわれはいる。なにも預言者から聴くのもなく、聴く見る、読むだけでよい。すべては啓示としてそこに、いつも示されている。

もちろんこういつく考えに対して、あなたは、たしかに美しいもの、崇高なもの、朝日に輝

く樹上の雪、月光のもと岩に砕ける波頭、林の梢を吹き渡る風に触れるとき、われわれはある神々しさを感得する。しかし醜いもの、悪しきもの、恐るべきものに触れても、お前はこの常在する啓示を感得するのかと、尋ねるでしょう。答えは言うまでもなく、そうです。ある意味で悪は善や美よりもより啓示としての教えを含み、はるかに神秘である。神は無垢の子供の死を、そして苦悩をどうして許容するのか？神秘性が増すにつれて、苦しみはいや増し、恐れにおののくと言うべきでしょうか。

確かにこういつく視点から見ても、イエスはモーゼやムハammadと等しく、いや仏陀や老子と同様に偉大なる人物であり続けます。しかし（おそらくあの巧妙かつ天才的なパオロの創作でしょうが）イエスをわたしはどうしても 神の子 とは見なせないのです。

常在する啓示の中で、わたしは平和と安心とを見いだしてきました。きわめておおくの理由から、わたしは 局在する啓示 よりも 常在する啓示 の方がはるかに優れていると思えたといつことをいま告白します。

そう、常在する啓示は、それこそ最初にこの世に到来した人類が不安と、感謝と、希望と不思議の思いをもって天を見上げたそのときから、つねに常在していたのです。もし局在する啓示の立場に立つなら、啓示は人類史のなかできわめて遅れて立ち現れたと言いつことになります。常在する啓示という考えに立つときはじめて、啓示宗教が現れる以前の人類、古代の、また異教の、そして未開の人々

にも啓示はあったといふことになり、この不自然さは解消するのです。そしてこの常在する啓示という観念のもとで、ネアンデルタール人も、さらに遠い過去の人々と同様に、われわれの親しき同胞、親しき精神の友となるのです。

この常在する啓示のもとでは、まさにある啓示を信するがゆえに、他の啓示の信者を物理的に抹消することに向かう、あのファンダメンタリスティックの崩壊現象は回避されるはずです。あの恐ろしい出来事は、すでに過去においていくともおこったことです。十字軍を、アメリカ大陸征服時のあの悲劇を、ヨーロッパを初め各大陸で繰り広げられた宗教戦争を想起するだけでよいでしょう。またあまたのテクストを引用するまでもなく、次の二つをあげるだけで十分でしょう。教父フランチェスコ・パニガローラ（一五四八―一五九四）は「ドグマにかんする教え」（フェララ、一五八五）においてこう言っています。「もし（キリスト教を信じない）不信仰ものに勝利すべく神が恩寵を賜るのであれば、彼等を赦すことなく、殺してしまえ」と。ときに心優しき仏教徒でさえ、輪廻に関する観念を危険な方向に押し曲げています。イエチケはかれのチベット語辞典（一二三頁）でこう言っています。「チベット人の信仰によれば、仏教の敵を殺すのは一つの慈悲である。それで彼が罪をさらにつみ重ねることが防げるからだ」と。（異なる宗教信条の保持者の共住を希求する）エクメニズムは、もし自己の宗教の啓示の内部にとどまるかぎり、こころよい懐のなかに

安住しつつ、かれらの言葉は、たんなる言葉、虚ろで偽善なものにとどまる。歴史ではなく、自然に結びついた常在する啓示こそが、深くかつ実感のこもった人類同士の精神的一体へと、われわれを導くのです。

常在する啓示という考えのもとでこそ、宗教と科学、人間と自然とのあいだの対立は克服されるはずで、科学はそこでは常在する啓示の探求になり、隠された神との協力のもとで、宗教的な営為と一体化するはずで、

常在する啓示こそが、遠き孤島で自足しつつ謙虚に住む人から、高度なる文明中心で最高の知性の高み達した人にいたるまで、すべての生きとし生ける人類のすべてが、ひとつになることを保証してくれるのです。

もう一度最後に、伝統的なきたりに従ったふさわしい告別の場を用意して、あなた方をお招きすることをしなかつたことの許しを乞うとともに、いままぜそうしなかつたかその理由がおわかりいただけただきまつ、お別れの言葉に代えさせていただきます。

フオスコ

河口慧海と宮崎武夫

平井 一正

宮崎武夫（一九〇五―一九四五）（以下敬称略）は昭和四年経済学部を卒業し、今西錦司らとともに三四年冬の白頭山、木原均らと

ともに三八年内蒙古学術調査隊などに参加し、活躍された先輩である。その宮崎が晩年の河口慧海（一九〇〇年と一九一四年禁断の国チベットに入った仏教探検家）と会い、そのときの記事を雑誌ケルンに寄稿している。興味ある人もいるかと思うので、原文を一部紹介したい。（一部現代仮名遣いに直した。文中西藏はチベットのこと）。懇談はいつ行われたか不明であるが、昭和一三年春頃ではないかと推定する。河口慧海とMACKの先輩が接点のあったことを知ることできて興味が尽きない。

なお残念ながら宮崎武夫のことは一般にあまり知られていないので、私のしらべた結果を次号のニュースレターで紹介したい。

宮崎さんのご家族の情報をご存じの方は平井までお知らせいただければ幸いです（名簿の宮崎緩夫氏の住所は間違いです）。

宮崎「西藏放談」ケルン、六十号、昭和一三年六月、十四―十七頁から抜粋

河口慧海の西藏旅行記、Three years in Tibet、などを読んで、一度師に会いたいと思っていたが、居所がわからなかった。古今書房の人に教えてもらって、世田谷の私の親類のつい近所であることがわかった。それで慧海師の声咳に接し、入蔵中の事柄や先縦者の苦楽を親しくきいて、わずかに西藏気分になりたいたいものと思つて先般訪れた。（宮崎は大阪市役所に勤務していた 平井注）。師は身長五尺七、八寸（一、七四m）、体重七二十貫（七五キロ）はあろうかとおもわれる

堂々たる体躯の持ち主で、腰もかがんでいるどころか姿勢はきわめて良く、その肉付きも非常によく、これが七三歳の老人とはとても思えない。その健やかさとその記憶力のすばらしさにはたいへん驚いた。高齢の人によく見つける耳や歯も悪くなく、眼鏡を用いなくても普通の文字は充分読めるということである。

昨今は蔵和事典の編集に没頭中のことであり、もとよりその身边を飾らず、短い粗衣に細い帯をしめ、白鬚をしごきながらぼつりぼつり話される貌には聖僧の面影があるが、他面その唇から漏れてくる英語があまりにも流暢なので、あたかも葉巻をくわえている紳士が腰にカルサン（意味不明 平井）をつけているといった様なある種の不似合いさを感じないでもない。

西蔵のことを伺っていて、青木文教、多田等観、寺本碗雅の諸師、それに矢島泰次郎（原文のまま。他書では保治郎 平井）の諸氏等々のエピソードを聞き得たのは嬉しかった。古い地学雑誌に、撮影者が記されていないが、西蔵の写真が小川琢治博士の解説つきでたくさん掲載されている。この頃に西蔵に行つた人は慧海師より外にはなさそうなので、慧海師がその匿名の主であるかどうかをきいてみたところ、西蔵の風物をカメラに収めてきた最初の邦人は青木文教師だとのこと、この明治三〇年代に早くも西蔵の写真をもたらしした人は慧海師にも心当たりがないようであった。

寺本師は北支蒙古地方に非常にくわしく北

清事変当時北京におられ、その後商隊に付き添い、隊商仲間に姿をやつして四川省を経てラサに入つた。とはいふもののラサ近くになると馬子が異国人を伴っているのを非常に気にしだし、要心して暗夜にラサにまぎれこんだ。それまではまだよかつたが、馬子はますます要心し、果ては恐怖心にとらわれ、昼間は人目につくのをはばかって一歩も室外に出さず、まるで監禁同様で、夜ひそかに町の景色を眺めるのであるが、もちろん真つ暗やみでも見えない。こんな状態で約一週間を送り、また暗夜にラサの町を出たのであるから、一週間滞在していたとはいふものの、「暗がりのラサ」を見ただけで市街の模様も何も判らずにラサを去つてしまつた由である。西蔵学者として令名の高いインド人のS.C.ダス（Sarat Chandra Das）がその死去する前年日本に來遊し、大阪郊外の能勢口に慧海師とともに滞在中、寺本師が訪問せられ、三人で當時のことを大いに語り合つたとのことである。

矢島氏は西蔵に來られ、西蔵の將兵の目前で急流を見事に泳ぎ渡つたので、水泳というものをおまじり知らぬ西蔵の人々は大いに驚嘆し、このことが機縁となつて、軍部に用いられることとなつた。そこで西蔵では、英、露、日本式の練兵を比較研究の結果、日本式を多分に取り入れることとなつたので、氏はますます重用せられ、その号令にも「右向け右」「回れ右」等と一時は日本語が用いられていた程である。

矢島氏は西蔵の婦人を娶られ、郷里前橋市に連れて帰つて來られたが、その後夫人は死

去されたが、氏はいまも前橋市おられるとのことである。

慧海師の話は次から次へと尽きるところがない。しかし師は蔵和辞典の編纂に寸暇を惜しんでおられ、この頃では一切の面会、集会を断つてひたすら辞典の完成に努めておられるので、この辺で辞去することにした。以上

注1 カルサンとはポルトガル語に由来し、南蛮人のズボンのように異様にふくらんだズボン。これが戦国時代に改良され、タテツケ袴や短袴になった。カルサン袴という袴もある。婦人用のモンペもここに由来する。

注2 河口慧海（一八六六—一九四五）は、昭和一五年（七四歳）、収集した教典などを東京本郷の東洋文庫に寄贈し、蔵和辞典編纂のために同文庫に通つて、これに専念する毎日を送っていた。昭和二十年二月脳溢血のために死去した。享年七九歳。

昭和三十三年二月、十三回忌に世田谷区奥沢九品仏浄真寺境内に河口慧海師碑が建立された。（平井記）

ベルニナ国際登山医学研修会

（平成十六年春）参加報告

中島 道郎

平成一六年三月二二—二七日、スイス・イタリア国境に近いベルニナ峠のホテル・オスピツィオ・ベルニナ（ホテルといつても殆

ど山小屋)で開催された国際登山医学研修会に参加したので、その様子を報告する。

これは登山医学国際認定医ばかり集めて再教育する研修会で、日中は「実技」と称してツアースキーを行い、ホテルに帰ってから夕食を挟んで座学を行なう、という面白い催しである。欧米から四、五〇人の参加があり、日本からは私を含めて三名が参加した。講師には、エヴェレストのホーンバイン・クローアールで有名なワシントン大学のホーンバイン教授も招かれていた。

ベルニナのロケーションを少し説明すると、保養地・スキーリゾートとして有名なサンモリッツから南下してイタリアに至る街道筋がベルニナ谷、その峠がベルニナ峠、このあたりはエンガディン地方と呼ばれている。この地方はグラウビュンデン・カントン(州)に属し、州都はクール。州の面積は日本の高知県に匹敵し、スイス国土の六分の一を占める。特異なのは、スイスの四公用語の一つロマンシュ語を話す人たちはこの州にだけ住んでいるとのことである。

以下、日記体で報告を綴る。

三月二〇日：関空から成田経由でチューリヒ。三人で一台のレンタカーを借り、空港近くのホテルに泊る。

二一日：チューリヒ・クール・サンモリッツ経由で夕方ホテル・オスピツィオ・ベルニナに到着。

二二日：ホテルの裏山・ピッツ・ラガルブの途中まで雪上散歩。われわれのガイドはヴォルフガンク・アンツというパーゼル在住の国

際免許を持つ優秀なガイドで、英語を完璧に話し、極めて親切。彼のメールアドレスは antzalin@yahoo.de。

二三日：ホテルの西、ラゴ・ピアンコ(白湖)の対岸、ピッツ・カンブレナ(三六〇三m)とサツサル・マソン(三〇三二m)の間のコルに到り引き返す。

二四日：クルマでベルニナ谷を降り、サンモリッツの北東、イン川左岸のマドウレイン村から西、ピッツ・ケツシュ(三四一八m)に登る途中の一つのピークで引き返す。

二五日：同じくイン川右岸、ムツセラ村の裏山、ムント・ムツセラに登る。森林限界以上は快適であったが、森林の中を滑るのはあまり愉快ではなかった。

二六日：ホテルのすぐ下にベルニナ・ディアフォレッツァというスキー場があり、その対岸の谷、ファル・ダル・ファイン谷を詰め、ピッツ・ダル・イエイスに登る。上は快適だが、この谷は傾斜が緩くてあまり愉快でない。二七日：午前中、雪崩救助実習。

以上で研修会を終了する。

午後、ベルニナ・ディアフォレッツァスキー場に三時間だけ遊ぶ。ピッツ・バル(三九〇五m)、ピッツ・ベラフィスタ(三八九三m)、ピッツ・ベルニナ(四〇四九m)の眺めを堪能。そのあとダヴォスに移動。ダヴォス・プラッツ駅前ホテルテルミヌスに投宿。(「地球の歩き方・スイス」にも紹介されている宿、お勧め。)

二八日：ダヴォス・ドルフからケーブルカーとロープウエーを乗り継いで、頂上ヴァイ

スフルーギツベルに到り、そこから方々滑り回る。非常にスケールの大きいスキー場である。但し、ダヴォスの町に帰るにはコースを余程慎重に選ばないと難しいコースの降りを強いられる。我々は選択を誤り、困難なルートを経て、町からかなり離れたヴォルフガンクという村に滑り降りた。

二九日：ホテルのすぐ前から出るロープウエーでヤコプスホルン山頂に登る。そこから難易さまざまなコースが楽しめる。非常に整備の行き届いたスキー場で、上手になったかと錯覚するほど。ここも、最後に町へのルート選択が問題で、またしても大失敗、大変困難なルートを降りた。

ダヴォス午後一時出発、三時無事チューリヒ空港に到着し、スイスの旅を終えた。

以上、スイスで得た感触は、スイスの山々はどこなりとスキーが出来る、雪質がよい、スキー場はよく整備されていて安全で快適である、ということに尽きよう。カナダのバンフやレイクルイーズもいいが、それよりも更

第二次梅里雪山鋒登山隊の収容作業報告

一九九八年から始まった明永氷河における遭難隊の収容作業は今年で七年目になりました。途中経過ですが、今年も現地作業にあたった小林尚礼会員からの報告などをお知らせ

します。

一昨年からは村民の協力による現地パトロールを状況に合わせて減らし、時々、氷河の様子を地元の明永村村長に電話で問い合わせしていました。五月二十三日に村長から、新たに遺体・遺品が見つかり、安全な場所へ安置したとの連絡がありました。場所は昨年の発見位置よりもさらに少し下流の右岸側とのことでした。

会員小林尚礼が六月二六日に現地入りしました。氷河の末端は昨年よりさらに後退し、遺体が初めて発見された一九九八年と比べれば一五〇mほど後退しています。氷河末端から水平距離は三〇〇m〜四〇〇mほど上流に下部アイスフォールの下端（昨年の発見場所）があり、今回の遺品の発見場所は、そこから下流へ一〇〇mほどの範囲に広がっていました。右岸・左岸の岸に近いところに比較的多く、中央部には少なく分布し、また今回の発見場所は観光用展望台の正面に当たるため、観光客からよく見える位置でした。

二つの遺体と三〇キログラムほどの遺品を収容しましたが、この時点ではまだ身元が分かりませんでした。六月二九日には大理下関へ戻り、茶毘に付して遺骨を日本へ持ち帰りました。一体についてはほとんど手がかりがありませんでしたが、もう一体は着衣や所持品の様子から日本人の可能性が高く、写真などで丹念に記録して日本帰国後、遭難前の写真から調べたところ、登山シャツの柄や特徴的な柄のスカーフなど複数の点で工藤隊員の特徴とほぼ完全に一致しており、ご家族にも

確認していただきましたので、遺骨は工藤隊員のご家族にお渡ししました。

昨年、探検家と自称する中国人や、一部の心ない明永村の村民が氷河へ降りて登山隊の遺品を拾い集め、報道機関や日本人観光客へ見せるということが起きました。小林尚礼会員が四月、訪中時に明永村へ立ち寄り、持ち主の分かるものを受け取ってご家族にお送りしました。その後、五月に再び自称探検家が遺品を昆明の張俊氏へ持ち込むということがありました。明永村村長や昆明の張俊氏でもこの件については合法的な対処法がなく有効な手を打てずにはいましたが、七月十五日から会員中川潔が昆明へ赴き、張俊氏と共に自称探検家を訪ねたところ謝礼金を要求してきました。中川による交渉で日記帳二冊を引き取り、それ以外の所有者不明の登山用具はそのままにして引き上げました。

（文責 吹田啓一郎）

大日岳事件に不起訴決定

二〇〇〇年三月、旧文部省登山研修所が主催し、北アルプス・大日岳で行われた「大雪山岳部リーダー冬山研修会」において、同峰頂上付近で起きた雪庇の崩落に巻き込まれ、参加した大学生二人が死亡した事故で、富山地方検察庁は本年六月九日、書類送検していた引率講師 山本一夫、高村真司両氏を、嫌疑不十分により不起訴処分とする決定をし

た。

新聞報道によれば、同地検ではこの日、担当検事である吉浦邦彦次席検事ら二人が記者会見し、旧文部省登山研修会関係者や専門家からの事情聴取、過去の記録の分析、現場での実況見分を行った事を説明した。そして不起訴とした理由として、崩落した雪庇は稜線から四〇メートル以上も伸びた巨大なもので、当時の登山界で考えられなかった、送検された二人は、相応の注意を払った上で休憩場所を選んだ ことなどを挙げ、吉浦次席検事は、「経験豊富な講師にとっても予測は困難だった」と結論づけた。また一部の専門家と言われる人達から、「別の方法で休憩場所を選定していたら事故を回避できた」と指摘があったことに対し、「当時、講師らがとった方法以上のものを求め、責任を追及することは出来ない」とした事も報じている。

このように同地検が懇切な記者会見を行っている事からも、この事件の社会的な重要性を考慮していたことが伺われる。

一方、主任講師であった山本一夫氏は、「ご遺族の心中を察すると素直には喜べない」と亡き内藤三恭司、溝上国秀両君に思いを寄せ、複雑な心境を語っている。

また両氏を支援する会では、今回の決定は「嫌疑不十分・不起訴」と言うもので、百分満足と言えるものではなかったが、健全な登山・登山技術の継承、今後の登山界の発展を思うとき、最小限誤った判断がなされなかった事を喜びたいとして、早速物心両面にわたる多大の支援頂いた広範な登山界の方々に、

齋藤惇生同会代表名にて不起訴決定を報告し、山本、高村両氏も感謝の意を表すと同時に、なお檢察審査会への不服申し立て、捜査再開などの恐れなしとしなないとして、引きつづきご支援をお願いしていた。

両親も檢察審査会に審査を申立せず

六月九日の不起訴決定以後、遺族がその決定を不服として檢察審査会に審査を申し入れるかどうか注目されていたが、二人の両親が七月三十一日、富山市の県民会館で記者会見し、審査を申し立てない事を明らかにした。これにて刑事事件として完全に終結となったが、今後山岳事故に潜む法律的諸問題の考察、従来の定説では律することが出来なかつた巨大雪崩ドーム崩落メカニズムの雪氷学、地形的研究、急速に進歩している機器を有効、適切に使用し、ルートファイディングや危険回避に正しく利用する方法の確率を目指すなどのため研究会を立ち上げ、研究成果を発表したいとしている。

(文責・編集 田中昌二郎)

新入会員紹介・奥宮清人氏

松林 公蔵

平成十六年よりAACKに入会した奥宮清人氏の紹介記事を、田中編集長から依頼されましたので、以下、彼の来歴を述べます。

私は、一九八五年は春にナムナニ、秋にマサコンと、ヒマラヤ行のため、一年間医業を休んでおりました。せいぜいか、マサコンから帰るとただちに、京大の主任教授から高知医大への赴任を命ぜられました。一九八六年四月、高知医大老年病科へ私が助手として着任すると同時に、高知医大を卒業し老年病科へ入局してきたのが奥宮君でした。

生つ粹の高知生まれの高知育ち、直情径行、行動に全くといつてよいほど、ためらいのない研修医でした。入学成績は学年で首席だったように生きておりますが、あたかも土佐の裏の畑でとれたてのような純粹無比の新米医師でしたので、指導医の立場からみれば逆にあぶなつかしく、親身にならざるを得ませんでした。次第に、私のフィールド的方向性にそまりながら、東京都老人医療センター、大阪住友病院などでの修練をかさねて中堅医師として成長していったようです。なお、フィールドにでた場合、内科医でもメスを握る技量が必要との認識から、大阪住友病院勤務時代は週に一度、新河端病院に通い、齋藤Y先生から外科手技の訓練も受けておりました。

一九九〇年のシシヤパンマ医学術登山隊の翌年、私は、高知医大からフンザ・カラコルムへ医学調査にでかけましたが、奥宮君はその主要な隊員のひとりでありました。シムシャール峡谷をゆく氷河行で、彼は、フィールドの素晴らしい目に開眼したと、のちに語っております。翌年、高知医大フンザ・カラコルム第二次隊の隊長をつとめて以降は、老年科、神経内科を超えた「フィールド医学」の

若き旗手として活躍しております。ここ数年間にわたるニューギニア医学調査、西ジャワ調査、ベトナム調査、ラオス調査、ミャンマー調査では、すべて私と行を共にし、若い院生医師たちの指導にあたってきました。これらのフィールド医学に関する業績が評価され、二〇〇四年一月から、総合地球環境学研究所の助教授として高知から京都に着任となりました。総合地球環境学研究所には、AACK会員の日高所長ほか、福島ヒーパーさん、中尾モンヤさん、齋藤オチヨコさん、窪田順平君たちがおられますので、これもひとつのえにしかと思いません。

臨床医が、病院勤務をはなれ、学際的研究機関へ異動するのは、心理的抵抗少なからざるものがあると思いますが、職業領域の垣根もなにもふみこえて、医学におけるフィールドサイエンスの創出をめざす彼の心意気は、AACKの精神にも通じるものがあると思ひ、ここに推薦する次第です。

事務局報告

理事会議事録

日時 平成十六年五月三十日(日) 午後一時〜午後二時三十分

場所 京都市左京区吉田河原町 京大会館

出席理事 木村雅昭、前田栄三、田中昌二郎、横山宏太郎、松林公蔵、牛田一成、永田

龍、吹田啓一郎、山田和人 以上九名
委任状によるもの 上田豊、福嶋義宏、松
沢哲郎、中川潔、人見五郎、高尾文雄、竹田
晋也、清水浩、小林尚礼 以上九名
欠席理事 なし

議事の経過および結果

会長木村雅昭が議長となり、「本日の出席
者は定款第二十一条第一項に示す定足数に達
しているので正式に議事に入る」旨発言があ
り議事に入った。

第一号議案

平成十五年度事業報告について

理事吹田啓一郎によって作成された平成十
五年度事業報告について逐一審議の結果、満
場一致でこれを承認した。

第二号議案

平成十五年度収支決算について

理事竹田晋也によって作成された平成十五
年度収支決算について逐一審議の結果、満場
一致でこれを承認した。

第三号議案

役員の一部新任について

議長より本会役員の一部新任について、左
記の二名の候補者が提出され、審議の結果満
場一致で承認した。

第四号議案

新入会員について

左記一名の本会入会申請者の紹介があり、
満場一致で承認した。

奥宮 清人

議長より「本日の社団法人京都大学学土山
岳会理事会の議事は以上をもって終了したの
で、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾
に議長ならびに理事二名が署名捺印するこ
と」として閉会を宣言した。

平成十六年五月三十日

社団法人 京都大学学土山岳会理事会

【総会議事録】

日時 平成十六年五月三十日(日) 午後

三時～午後四時三十分

場所 京都市左京区吉田河原町 京大会場

正会員の総数 二七三名

出席者数 一七八名

(うち委任状出席 一三九名)

議事の経過および結果

上記のとおり定款所定数の出席があり本会
は適法に成立したので理事(会長)木村雅昭
が定款の規定により議長となり、議事録署名
人に山田和人、永田龍の両名を選出した後、
下記議案の審議に入る。

第一号議案

平成十五年度事業報告および収支決算につい
て

担当の者より平成十五年度事業報告および
収支決算について報告があり、逐一審議の結
果、満場一致でこれを承認可決した。

第二号議案

平成十六年度事業計画および収支予算につい
て

議長は原案について担当者に説明を行わ

せ、これを議場に諮ったところ、満場一致で
原案どおり承認可決した。

第三号議案

役員の一部新任について

議長より本会役員の一部新任について、左
記の二名の候補者が提出され、審議の結果
満場一致で承認した。

第四号議案

新入会員について

平成十六年五月三十日開催の理事会におい
て承認を得た下記一名の本会入会申請者の紹
介があり、満場一致で承認した。

奥宮 清人

以上をもって議案全部の審議を終了したの
で午後四時三十分議長は閉会を宣し解散し
た。上記の決議を明確にするため議長および
議事録署名人において次のとおり署名押印す
る。

平成十六年五月三十日

社団法人京都大学学土山岳会総会

お願い

最近、住所不明で郵便の届かない会員が何
人かおられるので、ちょっと困っています。

池川 雅哉、石浜 宣夫、佐々江 洋太郎、
笹原 克夫、松井 宣也、松野 昌展、三田
村 喜彦

「以上の方々の連絡先をご存じの方は事務
局へお知らせください」

編集後記

マライニーさんはAACK会員ではないが、特に京大、AACKとは所縁が深いことは皆様ご承知のところ、その死を悼み、谷泰会員に追悼文をお願いしたところ、心のもった文をイタリアよりお送りいただくことが出来ました。

平井会員から、BIG NAMEの蔭に立派な働きをされた方々にまつわる話を連載いただけることになりました。今回はその第一弾として「川口慧海と宮崎武夫」を執筆いただきました。次号もご期待下さい。

国際高所医学会に参加された中島会員は、本年八月、中国青海省西寧市で開かれた高所医学会にも参加されています。この報告も次号でお願いできたらと思っています。

最近新入会員が「なし」という年が続きましたが、本年、奥宮清人氏をご加入いただきました。推薦者の松林会員からご紹介いただきました。今後ともどうか宜しく。

前田副会長は東京在住の会員らと共に、崑崙山脈の未踏峰登山計画の偵察の為、九月十五日出発した。一方、在関西の笹谷、田中の二名は、東チベット川蔵北路と南路の間、六千m未踏峰が偵察もされないまま手付かずの状態に残っている怒江（サルウィン川）源流地帯を旅し、現地事情を見聞して帰国しました。両旅行から新しい計画が生まれる事を期待したいと思います。

今三十二号の発行が、編集者の私用にて大変遅れましたことを、お詫びいたします。次号は気合を入れ、予定どおり速やかに発行したいと思います。次号（三十三号）の原稿締切日は、十一月十日、発行日は十二月十五日を予定しています。山行報告、報告、旅行記、エッセー等など分野を問いません。どうかとじどしご寄稿下さい。又編集についてご助言等もお願い致します。

（田中昌二郎）

編集委員 田中昌二郎

発行日 二〇〇四年九月末日

発行所 京都大学土山岳会

〒六二〇〇二 宇治市五ヶ庄

京都大学防災研究所

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一八

（株）土倉事務所